

虫も鳴やみぬめりと、の給はせたりければ、御返にきこえさせける、

松虫も鳴やみぬなり秋の野に誰よぶとてか花みにもこん

〔今物語〕大納言なりける人、内へまいりて女房あまたものがたりしける所に、やすらひければ、此

人のあふぎを、手ごとにとりてみけるに、弁のすがたしたりける人を、かきたりけるをみて、此女

房ども、なくねなそへそ、のべの松むし、とくちんぐにひとりごちあへるを、此人聞て、おかしとお

もひたるに、奥のかたより、たゞ今、人の來たるなめりとおぼゆるに、是はいかに、なくねなそへそ

とおぼゆるはと、したりがほにいふをとのするを、この今きたる人、しばしたためらひて、いと人に

く、いうなるけしきにて、源氏のしたかさねのしりは、みじか、るべきかは、とばかりしのびや

かにこたふるを、このおとこあはれにこ、ろにく、おぼえてぬしゆかしきものかな、誰ならん

とうちつけにうきたちけり、略○中
大かたの秋の別もかなしきになくねなそへそのべの松虫

〔古今和歌六帖〕まつむし

つらゆき

秋の野の露にぬれつ、誰くとか人まつ虫のこ、ろ鳴らん

こんといひしほども過にし秋の野にひとまつ虫の聲の悲しき

〔夫木和歌抄〕虫〔百首歌〕虫五十首中

藤原爲顯

ことのねにかよふはみねの秋風をなを松虫のこゑやそふらん

住吉社百首御歌

慈鎮和尙

すみよしのいがきのもとの虫のねにをのがこゑにも松風ぞある

〔源氏物語〕桐壺月は入がたの空きようすみわたれるに、かせいと涼しく吹て、草村の虫のこゑこ

ゑもまほしがほなるもいとたちはなれにくき草のものとたり、